

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第 6 講：生かされて生きる—生の意味論—

澤井義次

現代日本社会では、自殺者が 12 年連続で 3 万人を上回っている。現代人の多くはさまざまな心の悩みを抱えて、ややもすると「生きること」の意味を見失いつつあるのではないだろうか。そうした状況の中で、現代社会へ向けて、生きることの意味を提示することは、天理教教義学、とりわけ、天理教人間学が取り組むべき重要な研究課題である。ここでは天理教人間学の視座から、「生の意味論」ともいうべき、生の事実性に関する意味論的考察を展開してみたい。この講演は天理教コスモロジーの視座からみた「生の解釈学」の一つの試みである。

生の意味論的な視座

まず、意味論的な視座から、「生きること」の意味を理解するためには、生の日常的な意味、すなわち、社会慣習的な表層の意味のみならず、生の非日常的な意味、すなわち神秘的・宗教的な意味の視点をもつことが大切である。「意味論」(semantics) といえ、言語学において、言語あるいはテキストの「意味」を研究対象とする学問である。言語学の基礎は、スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールによって構築された。彼は言語が存在世界を構成しているにとらえた。社会や文化は「関係性の織り物」であり、日常生活において、当たり前に見える事物事象は、社会慣習のコードによって構築されたものである。このように事物事象をとらえる意味論的な視座をもつことによって、生きることの意味を深層の意味レベルで理解するための一つの契機を獲得することができる。意味論的な視座からみれば、私たちは文化的に構造化されている意味の世界に生きている。文化とは究極的に言語によって構造化された有機的な意味体系であるが、私たちは表層的な意味レベルから深層的な意味レベルに至るまで、コトバの二重の意味の中に生きている。

また、私たちの心は人間の思考、感情、意志、願望などを一体とした存在であるが、心を構造論的にとらえるために、次の三つの視座を挙げたい。まず、最初に人間の理性からの視座。それは、いわば「近代科学の知」の地平であり、その基本的な原理は客観性、普遍性、論理性によって特徴づけられる。次に人間の感性、たましい、スピリチュアリティからの視座。この視座は哲学者の中村雄二郎がいう「臨床の知」の地平に当たる。それはまた、ユングのいう「共時性」(シンクロニシティ)とか、「意味のある偶然の一致」などによっても特徴づけられる。さらに人間を超えたものからの視座。それは宗教的コスモロジー(人間観・世界観)の地平であり、宗教学者の M・エリアーデがいうホモ・レギオスス(homo religiosus)とか、R・オットーのいうヌミノゼ(das Numinöse)によって特徴づけられる。生の具体的な場を踏まえた人間理解をめざす生の意味論的な視座からみれば、宗教は人間理解のための一つの重要な鍵である。

心と生の意味世界は対応している。心の表層部分は日常的な意味世界に対応し、心の深層は非日常的な意味世界に対応している。東洋哲学者の井筒俊彦が『意識と本質』(岩波文庫)の中で指摘しているように、心が表層から深層へ深化するにつれ

て、存在の深みが開けていく。そこに、「当たり前」が当たり前でないという生き方への転換、生の根源とその自覚が可能となる。「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という」(明治 30 年 12 月 11 日)と教えられる天理教の意味世界が開けてくる。

「かしまの・かりもの」の教理—生の意味を理解するために—

天理教のコスモロジー(人間観・世界観)によれば、私たち人間は垂直次元のつながり(親神と人間が「をや」と子の人格的呼応関係にあること)と、水平次元のつながり(人間同士が親神を「をや」と仰ぐ一れつきょうだいであること)という二重のつながりの中に生きている。私たちはこのつながりを自覚することによって、親神の守護によって生かされて生きていることに気づくことができる。

三原典には、まさに「生の根源的事実性」が教示されているが、そこに記されている意味世界を、日常言語レベルの意味理解によって概念的に理解しようとしても、そこには限界がある。たとえば、「おさしづ」では、「どうせこうせこら言わんこれ言えん。言わん言えんの理を聞き分けるなら、何かの事も鮮やかと言う。それ人間という身の内という、皆神のかしまの・かりもの、心一つが我がの理」(明治 23 年 4 月 4 日補)と教えられる。生の意味を深く理解するための教えのポイントは、「かしまの・かりもの」の教理にある。この道の先人たちは日々の信仰生活の中で、この教理を理解し、心を治めるうえで「理を感じる」ことが重要であることを強調している。

一例として高安大教会初代会長の松村吉太郎の逸話を取り上げたい。彼は自伝『道の八十年』(養徳社)の中で、明治 26 年の秋(26 歳)、激しい赤痢にかかって、生死の境を彷徨った際のエピソードを記している。教祖の直弟子の一人、榊井伊三郎が見舞いに訪れた折、松村は榊井から「松村さん。心がたおれたら身がたおれる。心が死ねば身上も死ぬ。心が生きたら身上は生きるのや。身上は神様からの借物や、何も案じることいらん…」と諭されたという。松村は次のように述懐している。「その短かい言葉が、ピーンと胸にひびいた。もう何年という間、耳がたこになるほど聞いたお話だ。そのときは、そんなものとして聞き流し、更に一步、話の底に踏み込んで理をきわめようともしなかったが、今日ばかりは『そうだ、たしかにそうだ!』と思えた。さらに「今日までの松村吉太郎はここで死んで、これからは、神の用木として生きかえるのだ。これが命のきり継ぎだ。これをようしないようで、どこに信仰の徳があるといえよう」と心を定めたという。このエピソードは教理を知的に理解するばかりでなく、心に治めることが大切であることを物語っている。

三原典の言葉は言語学的にいえば、日常生活の中で使っている言葉と何ら変わらない。しかし、日常言語レベルの日常的な意味のうえに、意味が重ね書きされたかたちで、親神が根源的啓示を教示されていることを理解することが肝心である。原典の言葉の中に、非日常的な意味を求め、親神からの生の根源的啓示、すなわち、教えの理を感じるとともに、その意味をしつかり心に治めることが大切である。心の深みを拓くにつれて、親神の守護によって生かされて生きていることへの自覚が育まれ、人をたすける心で生きるという本来的な生き方をすることができるであろう。

教団付置研究所懇話会年次大会に参加、金光教本部を訪問

金子 昭

10月29日、第9回教団付置研究所懇話会年次大会が、金光教やつなみホールにて開催された（主催は金光教教学研究研究所）。同懇話会のオブザーバー会員である本研究所からは、深谷忠一 所長と金子昭が参加した。

参加者は全体で22研究所から計80人を数えた。「宗教者である研究者の集える場所づくり」のモットーの下、今大会ではテーマを「現代性へ／からの問い」として、5名の研究発表およびそれに基づく活発な討議が行われた。

発表内容は、活動実践面から、①曹洞宗総合研究センターの宇野全智氏による「こころの問題研究プロジェクトについて—『宗侶養成テキスト 人びとの心と向きあうために』刊行に携わって」、②浄土真宗本願寺派教学伝道研究センターの野呂靖氏による「宗教教団の社会活動におけるネットワーク理論構築の試み—自死問題への取り組みを通して」、③天台宗総合研究センターの村上興匡氏による「宗教団体における社会貢献について考える」の3題。

そして教義面からとして、④真宗大谷派教学研究研究所の安藤義浩氏による「現代と仏教思想—親鸞の視点から」、⑤オリエンズ宗教研究所の田畑邦治氏による「世俗と宗教の間—『源氏物語』の洞察から」の2題があった。

その後、総会が開かれ、各研究部会、学会報告や実行委員会からの諸報告があった。学会報告では、このたび事務局を天理大学及び天理教海外部に置くことになった東アジア宗教文化学会について、来年夏の韓国での大会開催予定の案内を金子が行った。終了後は交流会が開催され、他教団研究所との交流と親睦を深めた。

翌30日は、金光教本部と同教諸施設を訪問し、同教幹部の方々と懇談を行った。これは今回の年次大会参加にあたり、本研究所として事前にとくにお願いして、金光教教学研究研究所のご厚意で実現した我々だけのスケジュールである。

午前中は、金光新聞社で佐藤幸雄編集室長と懇談、また金光図書館では金光和道館長と懇談の後、館内を見学し貴重な書籍等を見せていただいた。さらに金光教庁では佐藤光俊教務総長とも親しく面談する機会を得、ご自身の信仰体験と同教の教会活動などについての話伺った。

昼食の後、本部広前に参拝し、教主（5代目金光様）にもご挨拶を申し上げた。それから金光教学院を訪問し、松岡学院長、



大会では活発な討議が行われた

横山学院次長とも懇談。その後、あわただしい時間であったが、金光教教学研究研究所を訪問し、戦前の文化財的な建築である建物を案内していただいた。

第231回研究報告会

「中国北方の青銅器文化—中原青銅器との対比から—」

文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻
准教授 小田木治太郎

中国では殷周時代（紀元前18世紀ごろ～紀元前3世紀）に豊かな青銅器文化が花開いたことはよく知られるところであろう。一方、これとほぼ同じ時期に中国の北方には、中国地域（中原）とは異なる青銅器文化が展開した。すなわち「中国北方青銅器文化」である。中原の青銅器文化が農耕を基盤とする文化・文明のものであるのに対して、中国北方青銅器文化は非農耕の生活様式、すなわち遊牧・牧畜を基盤とする文化のものである。

中国北方青銅器文化は、主に明代の長城に沿うようにその北側に細長く分布している。漢民族の地域に隣接するこの地域は、その一方で、巨視的に見るとユーラシア大陸の中緯度に断続的に分布するユーラシア・ステップの東端に属している。中国北方青銅器文化は、ユーラシア・ステップの遊牧民諸文化が形成した文化統合であるスキト＝シベリア様式の一部とも言えるのである。中国北方青銅器文化が盛行するのは、この地域に初期遊牧民文化が成立した紀元前1千年紀初頭から紀元前3世紀ごろである。

中国北方青銅器に対比する中原の青銅器は、世界的に見ても特異なほど高度に発達したものである。中原青銅器には、主に礼器と武器がある。礼器は、祖先祭祀に用いる儀礼専用の器であり、常は宗廟に備え置かれ、また墓に副葬された。儀礼に際して屠殺された犠牲の肉を煮る「烹煮器」、食べ物を盛りつける「盛食器」、酒を入れる「盛酒器」、酒を温める「温酒器」、酒を飲むための「飲酒器」、儀式に際して手を清めるのに用いる「水器」、そして儀礼の中で重要な音楽を奏でる「楽器」からなり、それぞれ多くの器種に分かれている。礼器の表面は、饗養文をはじめとする緻密で奇怪な怪獣文様で埋めつくされる。殷周の人びとがいかに祖先祭祀を重視し、そのためにいかに多大なエネルギーを投じたかを知ることができる。また、武器には戈・矛が多い。

一方の中国北方青銅器には、中原の礼器に当たるものは存在しない。基本的にすべてが実用品である。また容器などの大型品はなく、小型品ばかりである。利器には短剣・刀子があり、ほかには帯金具をはじめとする装飾金具が多数を占める。中国北方青銅器の大きな特徴は、これらに施された動物文様である。ヒツジ・ウマ・ウシなど彼らの生活を支えた家畜動物の文様と、トラや猛禽などの肉食動物の文様が多い。特に後者は、猛獣どうしが格闘するさまや猛獣が草食動物を捕食するさまを表したものが多く、これはユーラシア・ステップに広く共通する画題である。

このように中国北方地域の青銅器文化は、隣接する中原地域のそれと根本的に異なっている。ただし中国北方に巨大勢力の匈奴が成立し、中国地域では秦が台頭し戦国諸国の動きが活発化する紀元前4世紀末～3世紀になると、両者の影響が互いに及び合うようになる。漢代にはこの動きはますます顕著である。一旦、中国地域に定着した北方要素をもつ器物は、やがて東アジアに広がっている。このことから、日本も中国北方と決して無関係ではない。これを追跡するのが、これからの私の課題である。

日本社会福祉学会・第58回秋季大会で発表

八木三郎

10月9日～10日の2日間、日本社会福祉学会第58回秋季大会が日本福祉大学（名古屋キャンパス、美浜キャンパス）を会場として開催された。日本社会福祉学会は一般社団法人化に伴い、今年度から大会を2季に分け、春と秋に開催されることとなった。今回の秋季大会では「持続可能な社会福祉の展望と課題—経済・環境・福祉の視点から」がテーマとなった。

この背景には、新自由主義の時代として始まった21世紀において、近年の経済のグローバル化、規制緩和、競争による発展をキーワードにしたわが国の政策のあり方が格差と貧困の拡大を生み、加えて社会的に弱い立場にある人々を排除する状況が各地で生起している。そうした時代にあって、市民生活を取り巻く種々の不安定な要素を取り除き、将来への持続性や継続性を取り戻す社会保障・社会福祉の理論枠組みとその仕組みづくりについて、経済・環境・福祉の視点から追究した2日間の学会であった。

筆者は、2日目に行われた自由研究発表「障害（児）者福祉」の分科会で、現在、個人研究のテーマとしている「ユニバーサルデザイン施設における障害当事者性」について発表を行った。

全日本仏教徒会議栃木大会シンポジウムで発表

金子 昭

第41回全日本仏教徒会議栃木大会が、11月9日、10日の両日、宇都宮市内のホテルなどを会場に開催された。

初日は「慈悲の心—社会参加仏教」というテーマでシンポジウムが行われ、私もパネリストとして参加した。最初に話題提供として、社会参加仏教の事例紹介が行われた。まず、デリー大学教授のランジャン・ムコパディヤ氏が社会参加仏教（engaged Buddhism）について概念整理をした上で、その世界的な潮流について述べ、日本の事例として日蓮宗法音寺と立正佼成会の活動を紹介した。次に、私が世界最大の仏教NGOである台湾・慈濟基金会の歴史や活動の現況について報告。また天理教の社会活動についても紹介した。これを受けて、宗教学者の山折哲雄・前国際日本文化研究センター所長がコメントーターとして論評。その後、休憩をはさんで山口幸照・高野山大学准教授が司会役となって、パネルディスカッションが行われた。在家信徒への働きかけや仏教界における女性の積極的登用の必要性などが主な論点になった。

2日目は会場を市の文化会館に移し、記念式典と作曲家の船村徹氏の記念公演及び船村門下の歌手による歌謡ショーが行われた。

— お 知 ら せ —

天理大学 おやさと研究所
平成23年度公開教学講座

「現代社会と天理教」(2)

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的な事例の中から考えていきたいと思います。

多くの皆さまのご参加を、お待ちしております。

場所：天理教道友社6階ホール（予定）

時間：13:00～14:45

第1講	4月25日（月）	佐藤浩司
第2講	5月25日（水）	野口 茂
第3講	6月25日（土）	辻井正和
第4講	7月25日（月）	佐藤孝則
第5講	8月25日（木）	深川治道
第6講	9月25日（日）	森 洋明
第7講	10月25日（火）	井上昭洋
第8講	11月25日（金）	金子 昭
第9講	12月25日（日）	深谷忠一

演題等は次号で掲載致します。

※お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第11巻 第12号（通巻132号）

2010（平成22）年12月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan